

(6) 自閉症支援における評価の重要性

— 入所施設を利用する自閉症者に対する AAPEP による評価と職員の事前評価との比較から —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 山田 新二

【要 旨】

近年、自閉症者に対する評価のニーズが急速に高まってきているが、それは、評価をすることでそれぞれの自閉症者のもつ能力や障害特性など、個別支援計画のための手がかりとなる情報を客観的に明らかにすることができるからである。

米国ノースカロライナ大学で開発された、自閉症者、その家族、関係者を対象にする全集規模の包括的な支援プログラムである TEACCH プログラムでは、常に診断と評価に重点を置いており、診断をするために CARS を開発し、評価をするために PEP、AAPEP を開発した。

TEACCH プログラムでは自閉症者一人ひとりに対して必ず評価をし、その結果に基づき支援が展開されていくのであるが、日本においてはこれまで PEP、AAPEP を用いた研究は、事例研究を除いてはほとんどされてこなかった。

そこで本研究においては、入所施設を利用する成人の自閉症者を対象に、AAPEP の直接観察尺度の全項目について、現場で支援に関わる職員の利用者に

対する印象に基づく採点結果と、実際に AAPEP を実施した採点結果とを比較することにより、AAPEP による評価の意義について考察し、自閉症者支援における評価の重要性について言及することを目的とする。

各対象者について勤続年数 1 年目あるいは 2 年目の職員と勤続年数 5 年目以降の職員の 2 名の職員に事前に採点をしてもらった。採点結果の点数は、合格を 2 点、芽生え反応を 1 点、不合格を 0 点とし各領域について採点した。

AAPEP の採点結果と職員 2 名による事前採点とを比べた結果、その採点に大きく差がでる結果となった。統計的な差はでなかったが、差があること自体が、自閉症者に対する理解の難しさと、評価の必要性を示していると考える。AAPEP というフォーマルな評価をすることで、普段接するだけでは知り得なかったその人の自閉症としての特性を客観的に知ることができ、そこから支援案の見直し、改善ができる。AAPEP による評価は自閉症者を支援していくための「はじめの一步」であるといえる。